“国際シンポジウム「福祉と主体性」―脳科学と社会科学の統合―”

2023 年 9 月 29 日、30 日の二日間にわたり、“国際シンポジウム「福祉と主体性」―脳科学と社会科学の統合―”を、京都大学は国際科学イノベーション棟にて開催した。

国際シンポジウムのため当然のことながら、すべての講演と議論が英語での開催となったが、現地参加 55 名、オンライン参加 70 名の参加者を得て盛会のうちに終了した。

このシンポジウムは、脳・心・社会融合研究センターの松元健二教授（以下、松元 PM）がプロジェクトマネージャー（PM）を務めるムーンショット目標 9 のプロジェクト「脳指標の個人間比較に基づく福祉と主体性の最大化」（以下“福祉と主体性 MS プロジェクト”と略す）

の主催によるものである。

“福祉と主体性 MS プロジェクト”は、「2050 年までに人びとの“福祉”と“主体性”を個人間比較可能な脳指標を作成する」という目標を掲げ、2022 年 5 月 31 日にスタートした。これらの脳指標は、さまざまな政策を、それがもたらす人びとの“福祉”と“主体性”の観点から、科学的根拠に基づいて評価・比較することを可能にする。この目標を達成するために、“福祉と主体性 MS プロジェクト”は、(1) 現実世界におけるさまざまな客観的データ（潜在的な要因を含む）から“福祉”と“主体性”を特定、(2) その心理的側面を、仮想現実世界における個々人の脳活動から正確にデコードしたうえで科学的に正当な方法で集約、そして (3) その動的な脳内計算プロセスを、多数のニューロン活動を同時に大規模計測することによって明らかにしていく。こうして「脳科学と社会科学の統合」を実現する。このチャレンジングなプロジェクトを国内外に周知するとともに、その出発点を、人間の“福祉”と“主体性”向上に関心をお持ちの多くの方々と共有することを目的として開催したのが、「国際シンポジウム「福祉と主体性」―脳科学と社会科学の統合―」である。

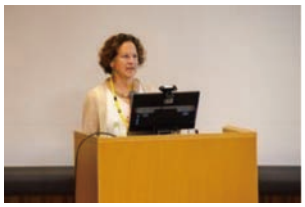
シンポジストは、“福祉と主体性 MS プロジェクト”

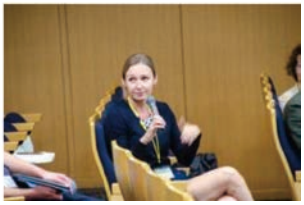
の9名すべての課題推進者（Principal Investigator）（後藤玲子（帝京大）、瀧川裕貴（東京大）、稲邑哲也（玉川大）、松森嘉織好（玉川大）、松元まどか（NCNP）、Ralph Adolphs（Caltech）、山田洋（筑波大）、小口峰樹（玉川大）、田中康裕（玉川大））に加えて、関連研究分野で世界をリードする8名の研究者（Marc Fleurbaey（CNRS, Princeton University）、Paul Glimcher（New York University）、Marc Erich Latoschik（Würzbrug University）、Yunzhe Liu（Beijing Normal University）、Adina L. Roskies（Dartmath College, UCSB）、William Stauffer（University of Pittsburgh）、Agnieszka Tymula（University of Sydney）、内田直滋（Harvard University））を海外から招聘した。齧歯類、サル、そしてヒトを対象とした神経科学だけでなく、バーチャルリアリティ技術、そして社会科学まで、これほど広範な分野の第一線の研究者が一堂に会して互いに議論する機会を得ることができたのは驚嘆に値する。

初日の冒頭、松元PMは開会挨拶で、“福祉と主体性MSプロジェクト”の目標と構想を紹介し、“国際シンポジウム「福祉と主体性」が、来たるべき科学の新段階を迎えるための画期的なイベントして後世の記憶に残るという期待”を表明した。続いて、“福祉と主体性MSプロジェクト”を含むムーンショット・プログラム目標9「2050年までに、こころの安らぎや活力を増大することで、精神的に豊かで躍動的な社会を実現」を統括するプログラムディレクターの熊谷誠慈教授（京都大学 人と社会の未来研究院）がプログラム全体について説明し、その中で“福祉と主体性MSプロジェクト”がブレイクスルーを形成することに対する期待を語った。

メインセッションに入ると、齧歯類の神経科学を専門とする田中准教授と内田教授、サルの意思決定を専門とする小口特任准教授とStauffer助教授、サルの神経経済学を専門とする山田准教授、神経経済学を専門とするGlimcher教授、Tymula教授、そしてヒトの神経科学を専門とするAdolphs教授による興味深い講演があった。講演内容はドーパミン信号、神経信号と行動で、経済学的観点などから価値、快楽、願望、報酬、そしてヒトの神経細胞活動と多岐にわたったが、いずれも“福祉と主体性MSプロジェクト”の基礎を成す脳内の信号と経済行動に関するもので、トークの質疑応答だけではなく、休憩時間中も活発に議論が展開された。

初日夜には、京都大学のシンボルとなっている時計台記念館内（シンポジウム会場にほぼ隣接）のレストラン「ラトゥール」において、さらにフランクな議論を続け、





福祉と主体性にアプローチする研究コミュニティ内の親睦を深めた。

二日目午前は、人文･社会科学のセッションからスタートし、哲学を専門とする Roskies 教授、規範経済学を専門とする後藤教授、そして計算社会科学を専門とする瀧川准教授が、それぞれの立場から、神経科学からは十分にアプローチできていない研究課題についての議論を展開した。

午後には、ヒトの脳生理学を専門とする松元室長と Liu 教授、仮想現実（VR）テクノロジーを専門とする Latoschik 教授と稲邑教授、そして効用の個人間比較を専門とする松森研究員からの講演があり、人文・社会科学と神経科学を統合するさまざまな可能性について議論が展開した。Fleurbaey 教授もウェルビーイングの計測とその個人間比較についてオンライン講演をする予定であったが、接続できず残念であった（2 日後の玉川大学脳科学研究所ラボツアーの際、ランチタイムに講演動画を皆で視聴した）が、その時間は、総合討論の時間に充て、各講演直後の議論だけでは不十分であった部分を補った。特に、脳活動による効用の個人間比較可能性について、神経科学、経済学、哲学からの第一線の研究者がこの問題を、分野を超えて議論する機会を得ることができたのは、まさに画期的なことであると思われた。

そして、外部評価委員の花川隆教授（京都大学）と隠岐さや香教授（東京大学）から、講評を頂いた。両委員とも、“福祉と主体性 MS プロジェクト”が、非常に難しいけれども非常に興味深くかつ重要な問題にアプローチしていることを高くご評価頂いた。これを受けて、閉

会の挨拶で松元教授は、開会の挨拶で表明した“国際シンポジウム「福祉と主体性」が、来たるべき科学の新段階を迎えるための画期的なイベントして後世の記憶に残るという期待”が実現に至るかどうかは、“このシンポジウムの参加者全員の主体性に掛かっている”としてシンポジウムを締め、最後に記念写真を撮影した。

京都で開催した「国際シンポジウム「福祉と主体性」—脳科学と社会科学の統合—」を通じ、神経科学と人文・社会科学とを、VR 技術をも活用しながら統合していくことを目指す新たなコミュニティが芽吹いた。この希有なコミュニティを核として、この新たな研究のトレンドを今後、より大きな潮流に発展させていき、人類にとっての科学の意義をさらに高めることが期待される。

（玉川大学脳科学研究所　松元健二）